



オランダ指導者研修報告

2012.10.27 ~11.05
エスパルスサッカー普及部

In Feyenoord Rotterdam



1. 研修報告総括にかえて

BE CREATIVE…見る、感じる、夢見る、挑戦する、実現する

《いつの日か私たちのクラブも…》

池谷 孝

(指導者養成委員長・清水エスパルス)

なぜオランダが

1648年の独立以来、歴史的に寛容の国であり、東インド会社を中心としたビジネスの世界に見られるようによい意味でルールに縛られない合理的で進取の気質に富んだ人々の国です。

狭い国土と1,700万人に満たない人口ながら知恵を絞り工夫することで、育成の大国、サッカーの大国のひとつになっています。R・ミケルスのもとトータルフットボールで世界を席卷し新しい流れを起こしたことやダッチビジョンとして育成のメソッドを世界に提示したことは、オランダ代表の活躍やアヤックス、フェイエノールトなどの世界的クラブの名とともに知られています。明快で合理的なサッカーをオープンな態度で提示し続けています。

なぜフェイエノールトが

1908年創立の名門クラブであり、育成の成功クラブとして2009年から3年連続してオランダの最優秀育成クラブ賞（RINUS・MICHEL'S AWARD）を受賞しています。2012年11月現在、トップ選手26名中18名が育成出身であり、ここ3年間で育成した選手の移籍金は25億円に上ります。



FEYENOORD ROTTERDAM の育成

■…成功する指導…

宝石を集めて、クラブの育成コンセプトを理解したクラブ出身のコーチが指導し、選手各人のアイディア、考えてプレーする力を引き出すことを軸にした指導方針。

■…成功の秘訣…

- ☐ 1. 明確なクラブの哲学、ビジョンの存在。時代の先を読み伝統のよさを引き継ぐ
- ☐ 2. 選手発掘のシステムと千里眼(25/50km,5/Holland,3/Europe)
[なるべく早く見つけサッカーを専門的に教える]
- ☐ 3. 1年ごとの選手の入替え、ハイレベルで均質な選手層の確保
- ☐ 4. クラブの育成環境（専門スタッフの連携、良質なグラウンド、必要十分な施設）
- ☐ 5. 7歳（U-8）から18歳（U-19）までの12年間のスパンでの育成
- ☐ 6. 年齢ごとに組まれた、力の拮抗したリーグ戦
- ☐ 7. クラブ出身のクオリティコーチによる指導

- 8. 先見性と指導力、マネージメント力にすぐれた育成GM の存在
- 9. 個人を伸ばす指導（教える、アイデアや気づきを生み出す指導(coaching)
- 10. 学校との連携による昼間のトレーニング時間の確保（12 歳以上）
- 11. 教育を重視。サッカーを通して大人にする
- 12. 情報を入れ変革しながらクラブのコンセプトを守り続けるスタイル
- 13. 育成の成功による財務面でのゆとり
- 14. 無理をさせない、怪我をさせない(選手は宝であり未来のスター)
- 15. スタジアムに通うファン,一体感をつくる総合的デザイン性

■…なるべく早くに見つけてなるべく早くからサッカーを教える…

- >プログラムに従った指導、個に注目した指導
- >その子どもがどうしたら一番伸びるかを考えて指導する
- >自分で考えて解決できる選手の育成
- >ゲームを理解できるように育てる
- >大人にする指導
- >無理をさせない、選手生命に影響を与えるような怪我をさせない
- >見て感じて真似る子ども・・・見てサッカー感を育てる

■…Play concept…

- >最初のボールは先ず前にプレーする
- >速いパス
- >速い動き
- >考えてプレー、読んでプレー
- >効果的なタイミングでプレーする
- >惜しみなく動く

オランダと日本の育成 …選手を見つける、育てる、トップへという流れの中で

■サッカーをはじめた子どもの違い（F.フェイエノールトの子ども、J.日本の多くの子ども）

- F.サッカーをやるために生まれてきた子ども(宝石)
- J.指導力によってうまくなるこども

■育成のスパン

- F.U-8～U-19（12 年間）のスパンで育てられる選手
 - ・ 18 歳で判断される選手
 - ・ チームの成果は重要ではない
- J.3 年間、もしくは 6 年間のスパンで育てられる子ども
 - ・ 22 歳で判断される選手
 - ・ 1 年もしくは 3 年のスパンでつくられるチーム

まとめ

■発掘(見つける・選んでいく作業)

ヨーロッパ、南米の発掘スタイルのスタンダードは真似できない。発掘のシステム、眼力、社会の仕組みに不備・不都合を抱える日本の現状から考えると…

- ①地域からタレントが生まれ、クラブに入ってくる環境づくりに注目。
- ②地域の指導環境、育成環境に積極的に関与、貢献していく・・・トレセンへの指導者派遣、チームへの指導者派遣、指導者養成。各協会、各指導者との濃密な関係性構築が有効

説明) 熟成された地域の育成環境から目利きのスカウトが選手を見つけ、さらに 1 年ごと選手を入れ替えるフェイエノールト(期限の差はあれ欧米のスタンダード)に対し、社会環境や育成環境の違うエスパルスでは、できるだけ小さい年齢から多くの子どもをエスパルスのピラミッド内に入れ、だんだんと濃くエスパルス色に染めていき地元出身のトップ選手排出につなげる育成のシステムが現実的でベターではないか。クラブ外でもアカデミー活動を柱に、協会、地域、指導者への協力、コンセンサスを共有しながら選手育成基盤を強化することが有効と考える。

■育成する…指導の発想と方法

問題解決力を育てる・・・練習上手でゲーム上手な選手育成

軸・・・[ボール技術]+[考える力]+[コンビネーションプレー]

・・・すべてに能動的なもの。トレーニングとゲームで、選手が自分自身で自分自身をうまくさせる

- ①人の問題解決力
- ②チームの問題解決力

サッカーをうまくする指導

1. ゲームに必要な技術を徹底的に教える指導 (teaching)
「繰り返し。判断・決断を伴うトレーニングでの技術習得」
2. 選手の考え、アイデアを引き出す指導 (coaching)
「答えを教えるのではない、問題の解き方を教えるのだ」
3. 選手の経験値、知識を増やす指導
「さまざまなゲーム、さまざまな経験が選手の直感や決断力を研ぎ澄ませる」
4. ポジティブなメンタリティを高水準で保たせる指導 (motivate)
「コーチがうまくするのではない、自分自身でうまくするのだ」
5. 人間教育としての指導・助ける (help)
「世界中のどのクラブでも教育は重要視されている」
人間としての教育がサッカーにもよい影響を与える

■チームを作る・・・スタイル、フォーメーションを基礎としたコンビネーションの構築

①イレブンのモビリティを作り上げる

- ・個々の力や問題解決力をチームの中で組織的に発揮させる
- ・流動的、機動的、効果的、スピーディなサッカー
- ・ポジションプレーからモビリティプレーへ

- ・モビリティアップのために
 - …ポジション適正、ジェネラリスト、スペシャリスト(player)
 - スタイル、システム、フレキシビリティ(team)
- ②チーム構築のメソッドのカatalog化

■プロフェッショナルコーチ(The professional coach)

- ▶教育者であり、サッカー指導の専門家
- ▶わかっていて、できる人…知らない、知ってる、わかっている、できる
- …情報通ではなく分析者、指摘者ではなく、解決者。つまり、分析を解決につなげる人

①技術を教える人(teaching)

詳細で現実的な技術論を持ち、選手のボール技術をうまくさせる。選手がサッカーをうまく行う基礎を作る。ゲームで活躍する基礎を作る

②考えることを促す人(coaching)

ゲームでどのように技術を使うか、ゲームでどのように走り、動くか

③選手の経験値、知識を増やす人

さまざまなゲーム、さまざまな経験が選手の直感や決断力を研ぎ澄ませる

④選手のポジティブなメンタリティを高水準に維持する人(motivate)

楽しいから学び続ける、楽しいから向上し続けることができる

⑤モビリティを作り出す人(game building)

正しいリスクを冒しながら、機動的に、連続的に、スピーディでテンポよくゴールに向かうサッカーを構築する。

⑥選手のケガや心身の健康に用心する人(help)

選手はサッカー界やクラブ発展の宝物

■ Marketing and Innovation…クラブと指導者は、分析し変革し続けなければならない

「選手育成、チーム作りのプロセスに終わりはない」

「先週良いサッカーをしたからといって今週良いサッカーをする保証はない」 (R. ミケルス)

■クラブと指導者の育成・指導メソッドの確立とカatalog化こそ！

「自分自身であり続けること。しかし、世界で行われていることについて情報収集しつつ発展していくこと。可能な修正について熟考すること」

- ・指導法を確立し、さらに変革していく
- ・積み上げながらシンプルにしてい
- ・文字化言語化視覚化する作業



3. 学びのまとめとして

「見つけたこと、発見したこと、活かすこと」

□報告者:

松尾大介、大川井淳士、江端真一、大野曜介、大塚高雅

松尾 大介 (43歳) [所属:SDF藤枝]

研修にあたって自分で設定したテーマの内、「フェイエノールトでの現場の実際を知る」と「町クラブの実際を知る」ということを振り返り比較する中で、池谷さんに頂いた「サッカーをするとは？」というテーマに迫り、そこからいろいろと紡ぎ出していきたいと思う。

■フェイエノールトでの現場の実際

▶選手レベル

選手レベルは非常に高く、学習意欲、トレーナビリティのいずれも高く感じた。それは7歳の時点から25名ものスカウト担当者が吟味して選手をスカウトしてくることに起因するところが大きく、またフェイエノールトを囲む環境の全てがフェイエノールトのサッカーと繋がっており、そこでプレーする選手、特に育成年代の選手のモチベーション向上に大きく寄与していると考えられる。1年単位で入れ替えが行われる点も見逃せない。

▶トレーニング

トレーニングはシンプルである。プレーのスタイルには合理性が表れ、ピッチに広がってスペースを十分に利用出来るポジションをとり、素早くパスを展開してゴールへと向かうサッカーが育成年代から行われていた。そのためトレーニングの内容は、パス、コントロールのドリルをあらゆる形式でシンプルに行うことと、様々なスタイルでのゲームがその中心を占めていた。したがって止める・蹴るの技術レベルは日本の選手と比較して非常に高いと感じた。

10歳までのクラスではボールフィーリング、ドリブル、パスとコントロール、ゲームなどを一定時間でローテーションしながらのトレーニングが行われており、総合的な技術の習得とゲームでの発揮を目的としていたことが伺われた。

また10歳までのクラスでもゲーム中に「なぜそうするのか?」、「そこでどんなプレーができるのか?」といったコーチングによる風景がなんども見られた。育成ダイレクターのステンリー氏によると、こういったコーチングを積極的に継続して行うことにより、選手自身の問題解決力を養うことを意図していることも説明があった。

11歳以上の年代ではコーディネーション系のトレーニングが頻繁に行われていた。年間を通して行うのか、時期的なものなのかは不明だが、13歳以上になると、90分のトレーニングの内、30分もの時間をコーディネーショントレーニングにあてていた。こ

れはオランダ人が特に大柄なためサッカーに必要なアジリティ能力やスプリント能力を、時間をかけてでも養おうといった狙いであると思われる。トレーニングの内容は、陸上の短距離選手がランニングフォームを習得、もしくは矯正するようなトレーニングであり、実際にそのトレーニングにあたっていたのは元陸上のメダリストのフィジカルコーチが担当していた。

■町クラブの実際(今回5カ所を見学)

▶選手とコーチ

選手レベルはフェイエノールトと比較すると少し落ちるチーム、また、止める・蹴るもままならない選手も多く存在する低いレベルのチームのいずれも存在した。しかしながら選手達は生き生きとトレーニングに励み、憧れと向上心を抱きながらプレーしている、サッカーをしている選手の集団であった。

トレーニング内容もフェイエノールトと同じようなポゼッションを目的としたゲームを行っているところが多かったが、レベルに合わせたドリブル、シュートなどのトレーニングを行っているチームもあった。

コーチは目の前のプレーに一喜一憂する場面が多くみられ、過干渉であるように見られる場面も多かった。

■発見そして活かすこと

上記以外にも様々な気付きがあり、そこに自分の考えや思いを重ねると膨大な量になる。

したがって、両者の比較から今回の学びの中で最も根元的であり、かつ今後のスクール活動を行う上で自分の考えの基本となる部分の学びを示したい。それは「サッカーをする」原点とは「トップの選手と同じ気持ちでトレーニングに励み、ゲームを戦う」ことだと現時点では勇気をもって結論付ける。

フェイエノールトの7歳の子ども、町クラブでプレーしていたあまり上手くない子ども、いずれの子どもも日本の子どもとはひと味違うフィーリングを自分は感じた。これが「サッカーをしている」姿なのか！と心が動かされた。確かに日本でも懸命に練習に取り組む姿や、奪われたボールを取り返しにいく姿など、オランダの様子と同じようなものはよく見かける。しかしながらそれは、コーチ、あるいは親に言われて、やらされている姿が多いのも事実であろう。だがオランダで観たものは自発的であり悲壮感の全くない姿であった。子ども達は週末のリーグ戦を戦っているが、それは週末のリーグ戦ではない。子ども達は選手であり、ホームゲームを戦っているのである。だからこそ必死であり全力であり、悔しさがありゴールや勝利の喜びがあるのだ。これはフェイエノールトと町クラブに共通して感じたことである。

今後自分の関わる子どもには、子どもから選手になってもらいたいと願う。そしてサッカーをさせたい。そしてサッカーを通して子どもから大人へ、大人から紳士へと成長するよう導いていける指導者になりたい。これが今回の研修の大きな気付き、発見である。

さらに、以下を心に刻んでスクールに取り組みたい。

- ・子どもを「選手」として扱う(扱えるように育てる)

「本物の選手だったらその場合どうする？」という問いかけ、「君たちは選手なんぞ」という呼びかけ。

- ・サッカーとエスパルスの両方により一層の憧れを持てるように育てる

(〇〇選手のゴールシーンを再現した練習、ガッツポーズの様子、プレーの解説)

- ・子どもたちを選手として扱うコーチ自身はよりプロフェッショナルを追求する

大川井淳士 (37歳) [所属:SDF静岡]

オランダに行ってみて、まず合理主義で無駄がない、個人主義といった印象を受けた。これはサッカーにも通ずるところが有り、「ゴール」「勝利」というものから逆算して、そのためによりシンプルにプレーすること、パススピードを活かしながらよりフリーの選手がプレーすることが徹底されている。ともすれば遊びがなく、退屈にも見えがちだが、まずはこの部分を理解することが最短距離でゴールを取る術であり、「サッカーをする」上でまず考えるべきポイントだと感じる。またボールに対しての責任感が、彼らの評価にも比例しており、個人で勝つことが大前提でサッカーが構築されていた。

■気付き

▶パスに隠された多くの要素(活かす)

- ①味方につながるパス1本が正確であれば、味方が余計な動きをしてルックアップ、判断を失うことがない。しっかりと良い姿勢で構えることができる。
- ②パスは出し手、受け手の2人の関係。そのために声(コミュニケーション)があり、出すタイミング、動き出すタイミングが大切である。
- ③受け手の次のヴィジョンがあるかどうか。トライアングルが完成して終わりではなくパスを受けたその先でどんなプレーを創造しているか。狙いがあるか。

▶繰り返すトレーニング(活かす)

U13～トップまでトライアングルのパス、タイミング、動きだしの同じトレーニングメニューを行っていた。チーム構築、コンセプトを浸透させるためには「変わらない」ものも必要だ。

▶試合に合わせたコンディション、モチベーション管理(活かす)

毎週行われる試合で常にモチベーションが保たれ、試合から逆算したトレーニングメニュー、コンディション管理(負荷のかけ方・木曜日の追い込む練習)、また年間通して行われるコーディネーション、体幹トレーニングで選手の故障を最小限に減らすこと。

▶攻撃のヒント／チームのベース作り(活かす)

中央にあるゴールに対して、サイドを有効に使うことで、敵をサイドに引っ張り出す。そのためのビルドアップ、サイドチェンジ、専門的なアタッカーの育成(クロスの質・入り方)、サイドアタッカーのOFFの動き、ファーサイドの意識など。

▶選手育成論

「押し付け」ではなく、問いかけ、考えさせ、納得させて、選手を導く、本物の理解を導き出す。ティーチングよりもコーチング。選手自身の潜在能力を最大限引き出す役割がコーチにはある。

■これからエスパルスでの指導に向けて(スクール/SS チーム)

①「サッカー＝パスゲーム」の意味合いを子供たちにもっと意識させる

パスゲームと言ってしまうと語弊があるが、やはりより効率的にゴールへ向かうにはパスが必要だ。

⇒「ボールを受ける」

⇒「ボールを渡す」

スクール(J1以降)において、これらのトレーニング時間、頻度を増やす。

[例として]

【スクール】

▽キッズ…「ボールと自分」ボールとの一体感を育む

▽チャイルド…「ボールと自分と相手」

ボールとの一体感を育むと同時にルックアップ、敵を感じることを覚える

▽J1…「ボールと自分と敵と味方」

本格的なパストレーニングの導入、判断力、選択肢を持ってプレーする

▽J2…「ボールと自分と敵と味方とスペース」

トライアングルサポートのポジション、試合におけるポジションの役割

②ポジションの役割の伝達

【スクール】J1以降～

ポジションの役割、プレーコンセプトの全体像を、子供たちに伝えていく。

[例として]

- ・GK：ゴールを守る最後の砦 唯一手の使える選手 ゴールを守る強い意志
- ・DF：相手の攻撃を防ぐ チャンスがあれば攻撃にも参加する
- ・MF：攻撃、守備両方に関わる選手 相手の攻撃の芽を摘み、攻撃を組み立てる
- ・FW：ゴールを決める選手
- ・中央でのポジション：フリーで受ける GAPでうける ターンして前を向く
- ・サイドでのポジション：ラインを背にする 攻撃の幅を作る ビックチャンスを出す

【SS チーム】

ポジションに関わらず、全員で必要な技術トレーニングを行うと同時に、ポジション別のスペシャリティを育てる特別なトレーニング時間の設定をしなければならない。

[例として]

- ・トレーニング終了後
- ・ポジション固定のトレーニング、ゲーム形式
- ・自分自身の特徴、武器と成りうるプレーを知る「自分を知る」どこが最適か。

③GAMEの価値観の伝達

【スクール】

- ・勝って喜ぶ、負けて悔しがる ⇒ 次へのモチベーション
(勝っても負けてもどちらでもいいやではダメ✕)
- ・試合で学ぶ 友達とのミニゲーム(遊びでもOK)から学ぶ ストリートサッカーの必要性
- ・ゴールする喜びを理解させる

【SS チーム】

- ・トレーニングは全て試合のため。試合で勝つために一生懸命トレーニングする。
試合からの逆算、試合への準備とは…
⇒トレーニング
⇒コンディショニング
⇒食事
⇒睡眠、休息
⇒コーディネーション、筋力トレーニング
⇒学校生活
これらの当たり前のことを常にできるよう、良い習慣にしていく。

④「サッカーをやる中でサッカーを学ぶ」

以前からトレーニングの最後は必ず試合を行っていたが、その試合の重要性を軽んじてはいなかったか、ということを目問自答させられた。また試合につながるまでのトレーニングがサッカーとかけ離れていなかったか、リアリティのない技術トレーニング、シチュエーショントレーニングで終わっていなかったかなど。

フェイエノールトのコーチは、ゲームから多くのことを学ぶ姿勢を持っていた。そして選手たちもゲームから多くのことを学ぶ、学べる選手が集まっていたように感じる。しかしながら、フェイエノールトの彼らにとってはそれがごく自然なのかもしれない。ゲームで互いに火花を散らし、競争し、自分で自分を高める。自分の特徴、武器にプライドを持ち、足りない部分をどう補うか。

日常的にトップチームの選手を目の当たりにし、その選手たちに憧れ、目標にする彼らではあるが、日本そしてエスパルスでもそれができる環境にしていかななくてはならないと強く感じた。

江端 真一 (38歳) [所属:SDF藤枝]

オランダサッカー協会から最優秀育成賞を3年連続で受賞しているフェイエノールト。その実績から、私達が学ぶべきものとは何なのか？そしてシステムはどのように構築され実践されているのか？をひとつのテーマとしてオランダ研修で学ばせていただきました。

■Feyenoord Academy ～育成システム～

7年前ステンリー氏が就任する以前、フェイエノールトアカデミーでは深刻な怪我や体制からフェイエノールトアカデミーを離てしまう選手が多くいた。

ステンリー氏が育成部長に就任して以来、以下のようなコンセプトを打ち出し変化を遂げてきた。

【Vision/Idea ビジョン/アイデア】

- ①個々の選手への養成が最優先
- ②ユース指導者の養成
- ③トレーニングレベルは常に高く
(週6回は多い為、週4回に変更、
しかし6回の内容よりも効果的なものにする)
- ④速い判断力、速い動き、速いパス、試合での
テンポは速くいなければならない

【Specialist スペシャリスト】

- ①トレーナー (元五輪代表陸上選手)
走力、コーディネート、安定力
- ②GKコーチ (元フェイエノールトTOP選手)
- ③映像分析者 (元オランダ代表選手)
- ④栄養士
- ⑤スポーツ心理学者

【Method 方法】

- ① トレーニングスケジュール
- ② トレーニング管理 (月～日)
- ③ 学校プログラム (Tr 前後)
- ④ 0/8 (7歳) ～0/19 (18歳) カテゴリー
- ⑤ 専門コーチ

【Coaching Matches コーチング】

- ・選手に問いかけて導き出す
- ・何が出来るポジショニングなのか？
- ・何を目的としてどのようにかわるのか？

【以上の結果】

現在では、選手に TOP に行きたいという自覚が芽生え、U19/17/16/15/14 で LeagueChampion になり National Teams 代表に多くの選手を出している。

■気付き・まとめ

▶一貫指導体制

0/8～TOP へ繋げる為、各カテゴリーで一貫したTr スケジュールが組まれ管理されていた。

エスパルスでは、キッズからJ IIまで、そしてSSチームへ、更にジュニアユース～ユース～トップへと繋がるよう、可能性のある選手を少しでも高いレベルへ、または良い環境で育成できるように情報交換や環境づくりしていくことが大切だと感じました。

▶学習

フェイエノールトでは、学校と提携してT r 前後に学校へ通う学習プログラムが組まれていた。サッカーと学習の両立は重要であり、日本では特に中学から高校進学を見据えた学習は大切なので、S S チーム選手の学校態度や学力のチェックはしていきたい。同時に大人になる為の学びや、正しい判断ができる人間性が重要だと感じた。

▶長期&短期のビジョン

フェイエノールトは長期的視野からビジョンを打ち立て、目標を明確にし、その為に必要な人材確保または環境作りを行い実行することで、良い選手を育てて最優秀育成賞を獲得。

エスパルスでは、石毛選手のようにスクールから TOP へ、また世界で活躍できる選手を育てる為に、長期ビジョンや目的を明確に持ち育成していくことが大切だと感じました。また、スクール生や小さな子供達がエスパルスのTOP 選手に憧れ、目標にしてサッカーをするような環境を作り上げていかななくてはならないと感じました。同時にファン作りも忘れてはならない重要な部分であると感じました。

▶質の高いトレーニング

一回の質の高いT r を積み重ねる。一度の“効果的なT r ”であることが大切で、コーチは熟考しメニューを組み、選手がシンプルに“サッカーをする”ことができる環境を作り出すことが大切。

S S チームでは、多くの役割をコーチ2名で行わなくてはならない為、様々な分野を学び対応する必要がある。

▶各年代の特徴や情報の整理

フェイエノールトは、各スペシャリストスタッフとカテゴリー別監督がいるが、T r や試合はカテゴリー関係なく、多くのコーチたちが関わっていた。自分もできるだけ多くのサッカーを観て、年代やレベル別特徴といった全体を幅広く観ることのできる視点や、選手個々の特徴など細部を観れる視点を養い、どの年代でも上達させることのできる指導方法を追求し整理すべきだと感じた。

▶自己責任

国民性の違いもあると思うが、J r 年代でも自己主張、自己責任が強く、その上で互いが認め合い関係が成立していた。協調性を持ち自分で行動できる力を持つことで、ピッチ上で自分の意思によってサッカーすることに繋がると思う。その為には、スクールでもS S チームでも、まず自信を持たせることや、何をすべきか？何をしたいか？を常に考えさせる問いかけや、長所を伸ばす指導を強く心掛けたい。

■まとめ

- ①フェイエノールトのトレーニングをそのまま日本に持ち込めばよいのではなく、良いものは取り入れ、日本人にあったトレーニングを組むべきだと感じた。そもそもサッカーをする環境や、観て感じてきているものが違うため比較するのは難しいが、ポジション

や攻撃の優先順位などをチャイルド・J 1クラスで伝えていく必要があると感じた。サッカーを始めたばかりの子供の中には理解に苦しむ子もいると思うが、逆に何も知らない子供に“サッカーとはこういうものだ”と伝えられれば、その子のサッカー感を作り上げる事ができると思う。

②フェイエノールトで学んだビジョンや指導方法を今一度整理して、エスパルススクールやSSチームで活かし、清水そして日本サッカーのレベルアップやファン作りに貢献していきたいと思います。

③「知らないという事はある意味幸せなことだが、知らないという事は怖いことでもある」「でも知ったら逆に不幸なこともある」池谷さんの研修中の言葉ですが、深い言葉だなと感じました。オランダをずっと知らずにいたらと考えると怖くなり、知ってしまう事で、選手、コーチ、ファン、スタジアムを含めた全てにおいて、このオランダの環境に日本が追いつけるのはいつだろう？と感じました。日本は、真似をした同じ道ではなく、独自の道を切り開くべきだと感じました。また、力の無い者ほど現実を知ってしまうとそれを受け入れられず苦しむ、といていたようにも聞こえ自分に置き換えると、重い言葉でした。今後も積極的に様々な場所に参加し、新しいものを発見し、学び、挑戦したいと思います。

大野曜介 (34歳) [所属:SDF富士]

■気づき

1. 各カテゴリーのトレーニング・ゲームを観て何に重点を置いているか。
 - ・ 早い判断・早い動き・早いパス・ゲームテンポ
 - ・ ゲームの時間が多い (週末のゲームにもっとも近いので)
 - ・ インサイドキックの技術 (コーチのデモが多く、正確)(観てまねる)
 - ・ 動いている味方にタイミングよく渡す (顔が上がっている・声がでている)
 - ・ 攻撃時のポジショニング (スタートポジションがフリーであれば動かない)
2. コーチが選手に対してどのように接しているか、どのように選手のプレーを変えるのか観る、感じる。(止める・運ぶ・蹴るの技術的部分)の指導と(判断・決断)に対しての指導
 - ・ 11歳までは教え込む部分が強い (質問から原則を導く)
 - ・ 感情起伏の多い選手に対してのトレーニング前後のコミュニケーションが多い
 - ・ フェイエノールトの選手としての誇りを強調
(前半不本意なハーフタイムにみんなはフェイエの選手なんだぞと連呼していた)
 - ・ 戦わない選手はいない (戦わないと切られる)
3. 止める・運ぶ・蹴るのドリルトレーニングを探し、スクール・チームのトレーニングに生かす。
 - ・ ひとつのドリルトレーニングが長い (30分ぐらい一つだけ行う)
 - ・ ゲーム分析からトレーニングを決めてトレーニングで解決する
 - ・ 集中力が高い (ひとつのインサイドキックから動く動作がプロそのもの)

4. U-12 までのカテゴリーでドリブル(ドリル・1対1)のトレーニングの割合を観る

- ・ドリブルのみのトレーニングはほとんどなかった
(運ぶ、かわす、抜く技術はすでに全員平均以上、基本的にボールを失わない
タレントを発掘してくるので)
- ・サイドの選手は黒人で、スピードで勝負する選手が多い (ゲームでも常に仕掛ける)

5. 各カテゴリーでの GK への関わり方

- ・GK コーチが専門的に7歳から分けて指導する時間を設けている
(7歳のキーパーが常にゲームに関わっている)
- ・当然GKにもFP同様の早い判断・早い動き・早いパスが求められている

■見つけたこと(学び)

子ども(7歳から)がプロ選手に憧れを持ち、身近に感じていることから、いいプレーを真似てサッカーをしていると感じた。トレーニングはシンプルな、止める・蹴るのドリルトレーニングで多くの繰り返しを行い、さまざまなオーガナイズでのゲーム形式に入る。7歳から18歳まで一貫して個人戦術を指導する。チーム戦術を全体に向って話しているところは1週間のトレーニング、ゲームの中では観られなかった。しかしゲームの戦い方は各カテゴリー共通である。トレーニングの一貫性とトップチームの戦い方がそれを生み出していると感じた。

サッカーを自ら考えてプレーし問題を解決するということはオランダでは生まれた時から始まっているように思う。家族、学校、地域、指導者がそういう自己責任の文化の上で育ち、それをあたりまえと思う国民性がサッカー中のやり取りを自然なものにしていると感じた。単純にゲームで必要な技術をトレーニングで繰り返し行い、良い見本を示し、ゲームで問題解決力を養うというができていないことが子供達のサッカーを難しくしている要因だと自分自身の指導をみつめることができた。

■課題

あれもこれもやらなければと袋小路に入り込み、確固たる指導の優先順位が整理されていないこと。どういうふうにやったら勝てるのかが先に来てしまい慌ててしまう。個人、個人を上手くしたら試合に勝っていたという状態にこれから持っていきたい。

■今後に活かすこと

まずエスパルスで担当するスクール指導ではサッカーが大好きだという子供を増やすことに重点を置きたい。その為には達成感をキーワードに取り組んでいく。トレーニングは簡単なことから少しずつステップアップしていくこととゲームで活かせる技術を繰り返し、飽きないようにオーガナイズすることを行う。チーム指導では個人戦術にスポットを当てて取り組む。シンプルにわかりやすい指導を心掛け選手との信頼関係を築くことと同時にあたりまえのことを自然とできる人となるよう共に歩んで行く。自分らしさを出して明るく前向きに取り組んでいきたい。

今後、エスパルスで自分のサッカーへの思いをどれだけ多くの人に伝えられるか、サッ

カーの魅力に気づいてもらえるかを意識的に取り組んでいきたい。なぜなら日本でもサッカーが文化としてこれから根付いていくと思うからであるが、巡回教室・スクール・チームで子供と真剣にサッカーを楽しみ、語ることがその第一歩だと感じる。コーチはプロ選手同様に子供達の憧れ、カッコいい存在であることが子供のハートに火をつける一つの要素だということを自覚し子供と接していきたい。

そしてサッカーの変わらない原理原則を理解し、ふまえた上で子供一人一人に合った指導を行いたい。教科書に書いてあることがすべての子供にあてはまらないことを感じながら、オランダでも感じた最終的に人の心を動かすことができるのはサッカーへの思いの強さだということをエスパルスの指導で実践していきたい。

大塚 高雅 (31 歳) [所属:SDF藤枝]

■まとめとして

オランダでは全てにおいて[なぜ?]が、より明確な理由で存在しているように感じた。実際元々知識としてあったものはより理解を深め、そうでなかったものはシンプルに自分の中に取り込めた。一層深めてピッチに落とし込めると感じた。

■気づき

▶1-4-2-3-1

以前からこの形でオランダのチームはシステムを構築しているということは知っていたが、フェイエノールトの各カテゴリーを実際観ることでさらにこのシステムについて深めることができた。下記の通りの感じである。

GK を含めたボールポゼッション、センターバックの③、④が大きく拡がりサイドバックの②、⑤が高い位置をとる。ダブルボランチの⑥、⑧がお互いを見ながらポジションをとる⑥、⑧がサイドバックの位置をとることもあり、その時はサイドバックがさらに高い位置をとりサイドアタッカーの⑦、⑪が中央にはいる。⑩が流動的に動きボールを持ったらワクワクするプレーをする。サイドアタッカーの⑦、⑪にはスピードと迫力のある選手をおき、中央には⑨でヒョロッと大きいポストプレーヤーのような選手を配置していた。これはトップチームだけでなく下の 11 歳から行っていた。(※さらに下のカテゴリーでは 6 : 6 +GK であった)

▶トレーニング内容

13 歳～18 歳までトレーニングの最初は元オランダ陸上代表選手によるステップワーク、体幹トレーニング、コーディネーショントレーニングを行っていた。細かく姿勢を修正し正しいフォームに逐一矯正していた。ボールを使ったトレーニングではどのカテゴリーのターン、パス、コントロールのドリルのあとゲーム形式のトレーニングを行っていた。約 75 分のトレーニングであった。やはり下のカテゴリーになればなるほど細かい指導があり、上のカテゴリーではほとんど細かい事は言わずプレーさせていた。上記のシステムでの役割で扱う技術をシンプルに明確に行っていた印象であった。具体的には①渡すこと。②受ける事。③前を向くこと。④ワンタッチで落とすこと。のトレーニングを繰り返し行っていた。

ボールサイズは7歳～9歳4号球、10歳～12歳5号軽量、13歳～5号球であった。

▶ゲームルール

7歳～9歳では6：6+GK、審判一人制、ハーフコート、GKどこでも手を使える、GKへのバックパスOK、オフサイドなし、12歳では11対11、CK9.15ラインから。

オランダ独自の、選手目線のルールを多用していた。

■今後に活かすこと

▶フォーメーション

日頃のトレーニング内容を構築する際、自分自身でこのような番号により役割を明確にしてあることでもっと選手にとって理解しやすいものを提供できると感じた。より自分の中で単純明快に整理する作業が必要である。

▶トレーニング

- ① よりシンプルにすること。
- ② 多くの繰り返しをさせること。
- ③ ゲームの時間を多くすること。

今まで知識としてあったことがもっと普段の自分が受け持っている選手に対して実践しなければと再確認した。

▶プレーヤーズファースト

オランダでは概念に囚われず選手目線のオーガナイズでトレーニング、ゲームのルールを設定していた。ピッチサイズ、ボールサイズやゴールキック、コーナーキックの距離など。普段の活動でもより柔軟な発想で選手たちがサッカーを楽しめ、没頭できるオーガナイズを提供していきたい。

内藤 康貴 (33歳) [所属:静岡県立磐田農業高等学校(筑波大学研修生)]

■見つけたこと

▶「蹴る技術の高さ」:

パススピードが速い。しっかりと踏み込んで蹴るフォームがきれい。1タッチ(ダイレクト)パスも上手いが、味方が見えているからこそできるプレーでもある。

▶「スペースへのパスが多い」:

相手を外した味方の足元へのパスよりも味方が走り込んでいるスペースへのパスが多く、それによって選手が走ってプレーしているという印象に。

▶「個人戦術の高さ」:

トレーニングからもチームとしてのパターンは確立しているが、ゲームになった時の個人の状況判断力は高く全員が考えてよい状況判断でプレーできている。

▶「驚異となる攻撃のプレー」:

高い位置でボールを奪ってから、前に出ていくプレー。特に、チャンスではボランチや3列目が前に出ていくスピードと回数が重要。また、積極的にしかけていくことが、フェイエ対アヤックスのユース所属の選手を見ても大切であると感じた。しかけの回数と成功数が増えていくことでさらに驚異な攻撃となる。

▶「高い目標設定と選手の自覚」:

結果ではなく個々の選手の養成が最優先という教育からトップに上がることが全てであることを選手が理解しており、試合での落ち着いたプレーや自信溢れるプレー、普段からの大人な振る舞い（教育や文化の影響も）に繋がっている。

▶「サッカー環境の差」:

国内リーグは7歳から年間を通したリーグ戦。フェイエでは、下の年代の選手がユース年代のゲームやトップの練習を見られる環境になっている。O-8(7歳)のゲームを見ても、ボールに群がらず大人と同じサッカーをしており、ゴールが決まった時の喜び方もトップ選手と同じ。ルールにこだわるのではなくサッカーをやっている。

アマチュアクラブでは、ロッテルダム市内だけで200のチームがあり、そのほとんどが最低でも天然芝1面、人工芝1面、補助グラウンドを持っているハード面の充実さ。施設内にはカフェがあり、送迎の父母だけでなくスタッフやスポンサー、ファンなど多くの人がサッカーのために集まって来る場がある。まさにサッカーが生活の一部となっている。

▶「フィット・フレッシュ」:

週4回の短時間(TR1、2を省いてTR3から入る)トレーニングで常に高い内容とレベルを保つことができる。けが人もほとんどなく、試合でのベストパフォーマンス、後半の動きが明らかによくなり、結果にもつながっている。

O-15~O-19(14歳~18歳)の1週間のトレーニング時間の平均は213分(別P参照)。1日90分で週5日トレーニングした場合は450分。日本の育成年代のチームと比較してもフェイエのトレーニング時間は半分以下である。けが人ばかりで常にベスト布陣で臨めない日本の多くのチームには参考になるデータである。

▶「戦術的ピリオダイゼーションとの比較」:

O-15~O-19(14歳~18歳)の1週間のトレーニングのうち、ボールを使ったトレーニングが69%、ボールを使わないトレーニングが31%(別P参照)。元陸上五輪選手がコーチとなって取り組むコーディネーションの割合が多いことが一番の要因である。ハムストリングを徹底的に強化し体幹を鍛え、常に正しい姿勢を意識して体を動かすことで、スピードアップだけでなくいい立ち姿で重心のブレない体といったプレーにもいい影響を与えている。育成はトップレベルの選手が集い、トップの半分は黒人のフェイエにあって、自分たちのサッカーを実現するためにはいいプログラムではあるが、アジリティが高くて、技術の追求が必要な日本人にとっては考えるべき点であると思う。

■学んだこと

▶「ボールを動かす1st タッチ」：

トラップを足元に止めるというよりも、相手を見て動かすトラップが多く、その技術は高い。「ランウィズザボール」も多用されているが、「止める」技術にはムダが多くスペースが狭い位置では奪われることが多かった。「止める」位置についてコーチが指摘することは特になく、ここはつき詰めていく必要が多いにあると感じた。

▶「受け手のタイミング」：

出し手のタイミングを見て相手から離れてボールを受けることを、トレーニングから徹底的に追求していた。ただ、相手を見て逆をつく動きが少なくパターン化していたので、トレーニングから相手の逆をつく意識をさせる必要がある。

▶「個人主義で合理的なサッカー」：

自分の身は自分で守る精神が自分のボールは絶対に奪われない、自分のサイドは抜かれないプレーに繋がっておりカバーリングの概念は低い。また身体能力を前面に出してしかける伝統的なサイドアタックの確立は合理的である。

■今後に活かすこと(自分の課題が何であるか)

▶「日本人はすべてをやるとうとするメンタリティは素晴らしいが・・・(ステンリー氏)」：

指導者として、あれもこれもやりたがる部分は自分にもある。フェイエではコーディネーションの割合が高いが、日本人はアジリティ能力が高い（例：フェイエ日本人プレイヤー多田憲介を見ても分かる）のでそこに費やす時間は短く、日本人のメンタリティに合ったサッカーを考えて、もっと技術的なトレーニングをしつこくやらせていいのではと思った。身体能力を前面に出して戦うのではなく技術を追求したサッカーをやるために、もっと技術に重点を置いた指導をするべきだということを学んだ。ただフェイエの選手の、姿勢のよさがよいプレーに影響していることから、常により姿勢（下を向いているのではなく顔を上げてプレー）を意識してやらせることも継続的に伝えていきたい。

▶「18 歳までに判断される」：

才能を18歳までに判断されるオランダと違い、大学出身のJリーガーの割合やU-20W杯予選敗退とU-23五輪出場の関係を見ても日本人は20歳からでも伸びる。これまでの自分の指導は選手にとって「高校サッカーがすべて」と言われてもおかしくない指導をしていたかもしれない。その先を見据えて、育成年代に必要な「技術」「個人戦術」「モチベーション」「目標」を選手に与えていくことが必要だと感じた。

▶「(海外で)本物を知り本気になる」：

クラブのハード面や規模、仕組み、生活におけるサッカーの地位など、今回見たこと感じたことは実際に海外に行かなくてはわからない。今後も定期的に本物を見て、選手

にもその機会を持たせることが大事であると思った。

また、見たことを取り入れていくことも可能である。例えば年間通したリーグ戦を自チーム内で取り入れたり、カテゴリーが上のチームと連携を取ったり、近隣の方々や小年代のチームと交流したり、そういった活動がハード面の充実や選手の育成にも結びつくと思う。そして、「日本でトップレベルのチーム」をつくり「世界で戦える選手を育成する」ことに指導者である自分が本気で取り組むことが絶対的に必要であるし、実現しようと心に誓った。

参考資料①

O-19（18歳）～O-13（12歳）の1週間（トレーニング4日、ゲーム1日、オフ2日）

月	火	水	木	金	土	日
TR・GK別	TR・筋力 (ゲームの時も)	オフ	TR・11対11	TR・試合用	試合	オフ (トップ観戦)
負荷 80%	90%	0%	100%	0%	100%	0%

参考資料②

1週間のトレーニング時間（週末ゲームは除く）とボールを使ったトレーニングの割合

カテゴリー	トレーニング時間	ボール TR 割合	ボールなし TR 割合
O-15（14歳）	229分（159分）	80%（72%）	20%（28%）
O-16（15歳）	205分	56%	44%
O-17（16歳）	231分（141分）	83%（73%）	17%（27%）
O-18（17歳）	226分	62%	38%
O-19（18歳）	174分	64%	36%
平均	213分	69%（65%）	31%（35%）

※O-15とO-17は平日にゲーム（O-15は70分、O-17は90分）があったため。カッコ内数字は平日ゲーム時間を含めない場合。

典型的な日本のトレーニング時間・・・1日90分×週5日＝450分と比較すると・・・

4. ステンリー講義 (by Stanley brard)

フェイエノールトの選手育成

- 講師：Stanley Brard. フェイエノールトアカデミー統括
- 日時：10月31日(水)
- 場所：FEYENOORD ACADEMY CLUB HOUSE
- 報告者：大野曜介（SDF 富士）



ス



テンリー氏と。フェイエノールトアカデミー紹介ビデオから始まりパワーポイントで行われた

■レクチャー

【7年前ステンリー氏が来る前のクラブの状態】

- ・質の高い選手はいた (過去も未来もいい選手がいることは知っている)
- ・良い教育 (学校教育を通して)
- ・結果が優先 (結果がすべて)
- ・豊富な活動 (1年に6個の大会、週6回のTR、家からの送迎の時間)
- ・深刻な怪我 (多くの活動から怪我につながる)
- ・アカデミーを離れる選手 (メディア等の批判を受ける)

【クラブのビジョン・アイディア】 <ステンリー氏がクラブ幹部と話し合い7年前に変えた>

- ・個々の選手 (育成クラブへの明確な変更)
- ・ユース指導者育成 (フェイエノールトのトップ選手から)
- ・トレーニング強度を変える (週6回から週4回へトレーニングの頻度を変えた)
- ・早い判断・早い動き・早いパス・試合でのテンポ (ユースとトップの差をなくす)

【スペシャリスト…専門化。専門家に任せる部分は任せる】

- ・トレーナー…走力、コーディネート、安定力
- ・GKコーチ

- ・映像分析者
- ・栄養士
- ・スポーツ心理学者（すべてのカテゴリーの監督がスペシャリストの上にいる。スペシャリストはアシスタントの役割を担う）

【育成プログラム】

1) トレーニングスケジュールとシステム

…学校よりアカデミーでのトレーニング優先→学校と提携アカデミー生100人が通う。しかし7歳から12歳は自宅近くの学校に通いトレーニングは夕方から行う。

2) トレーニング管理

月	火	水	木	金
TR GK別	TR 体力、筋力	off	TR 11対11 中心	TR 試合前TR

3) 学校のプログラム（トレーニング前後に行う）

4) カテゴリー…7歳～18歳（各カテゴリー20人 17,18歳は学校には行かない）

5) 監督、コーチ以外のトレーニング・教育のスペシャリストがいる（監督、コーチと連携する）

【7～9歳のトレーニングの様相と指導】

この年代の子にボールを投げ入れると自然に好きなポジションにつく。前にいる子は攻撃的で守備をやったことがないかもしれない。そして、大人が目でわかるポジションにはつかない。

つまりこの年代の子どもはボールの周りに集まるのが自然であるが、そういう時でも指導者は子どもたちにサッカーをさせるための問い掛けをすることが大切である。例えば、「A君のキックが15M飛ぶとしたらそこにいていいのかなあ？」問いかけの適切さや言葉の選び方で、この年代から自分で考えて決定することでいいサッカーの考え方を育てるようになる。

【7年間の結果】

①すべてのカテゴリーにトップクラスのプログラムを提供するようになった。

…毎週月、金曜7:30から試合分析から導き出されたTRプログラムを話し合い監督が決定する。

結果、個人のレベルを上げることが出来るようになった。

②選手の自覚が向上しトップ選手になることを現実のものとしてとらえるようになった。

③選手がゲームによりフィットしフレッシュさを保ちながらプログラムを消化できるようになった。

…トレーニングを週6回から週4回に減らした結果、選手の負担が軽減され。ゲームの前後半でパフォーマンスを落とさずにプレーすることが出来るようになった。コンディション管理は能力、体力のテスト(シャトルランなど)を行う。結果各カテゴリーのリーグで優勝するようになった。

④U-19, 17, 16, 15, 14のカテゴリーリーグで優勝

…あくまでもトップ選手育成が重要で、そのためのプログラムを重要視するビジョン。優勝は重要ではない。

⑤多くのカテゴリーでオランダ代表選手を排出するようになった。

…多くの代表を出すことが大事ではなくいいプログラムを行うことが大事。よい育成プログラムの成果として各カテゴリーのオランダ代表が生まれている。

【成功の証明＝パワーポイントの最後に】

- ①過去 3 年間**アカデミー選手**で得た金額は **25 億 7 千万**
- ②4 年前 40 億の負債を抱えていたが今年の 6 月に**黒字化**に成功
- ③現在のトップチーム登録 26 人の内 **18 人**はアカデミー出身

【レクチャーを受けての感想】

指導者として、これだけサッカーに打ち込める環境を率直に羨ましく感じました。

選手の怪我に対する危機感や怪我をしないための配慮が非常に明快で、怪我さえなければトップに上げることが出来るという育成の自信も伺えました。ロッテルダムやオランダ国内、スクールのあるガーナなどの諸外国に存在する目利きのスカウトの、7歳の、サッカーをやるために生まれてきた子供を見抜く目がフェイエノールトアカデミーの育成を成功に導いている一つだと感じます。もちろん個別のデータ等を駆使したプログラムをもとにした育成力があってのトップ昇格数があるとも感じます。

■質疑応答Q&A

Q、選手をスカウトするポイントは？

A、まず年齢が若ければ若い方がいい。若くていい動きをすればいい選手になる可能性は高い。いいパスが出せる、パスの為の動きが出来る、いいフェイントが出来る、体の使い方がうまい、他の選手とのコンビネーションが出来る、速い、真剣さなどを評価する。視線を下げずいつでも周りをよく観ている子も大事です。

これ以上は有料です(笑)

Q、トレーニングやゲームでプレーしていれば自然に身につく技術と意図的に教える技術があると思うがそのへんはどうしていますか？

A、例えば、この状況では受ける足はこっちで、体の向きはこっちで、ボールの置き所はこうだよとは教えます。
トレーニングは簡単なことから始めます。繰り返し繰り返し練習し、あまり止めないこと。
コーチがよい見本を見せること(オランダではしゃべるだけのコーチはよくないです)

Q、コーチがゲームのハーフタイムでサッカーをしようと言っていたが、日本では「サッカーをしよう」がニュアンスとして伝わらない。サッカーをするということをどう指導していますか？

A、指導者が選手に「なぜ」を聞くことが大事。そして、選手の答えに対して又質問、さらに質問をしていくといったようにして選手のアイディアを導き出すことがよい。そして、選手自身が自分で答えを見つけられるようにしていく。
そうしていくと、選手はユースから同じ教育を受けているのでトップチームではコーチがそんなにしゃべらなくても中心選手2、3人が戦術を理解していればうまくいく。
トップまでの過程の中で、小さい年齢のうちに説明して教え込むこともあります。

Q、7歳の子の場合、コーチがさまざま面で親にアプローチすることもありますか？

A、親に対してもさまざまなアプローチやマネジメントをしています。私(ステンリー氏)が行います。

7年前私は、クラブやトレーニングや子どもへの理解を深めてもらうために親にトレーニングやゲームをぜひ観に来なさいと言いました。しかし来年からはトレーニング場には入れないようにします。なぜならトレーニングのそばに親がいることによってコーチが何人もいることになってしまいます。これは迷惑なことですし、そのことによって子どもが選手としてではなく子供のままトレーニングするということが起こります。私たちは子どもを相手にしません、選手を相手にしたいのです。

Q、3年間グランパスにいましたが日本のサッカーから学んだものはありますか？

A、たくさんありますが、残念ながらサッカーのことでは学んだことはありません。今フェイエノールトアカデミーでやっていることは日本にいたときに考えていたことです。日本では一生懸命働くということを学びました(笑)。日本人は始めから全てをやろうとする。これは良い部分だとも思いましたが、サッカーではあれもこれもではなくこれからだよと教えるのに苦労しました。

Q、リーグ戦の意義について

A、毎週試合がコンスタントにあるリーグ戦が選手にもコーチにも有意義です。イギリスの育成があまりうまくいっていないのは16歳までコンスタントにリーグ戦がないからかもしれません。オランダは長期的ビジョンのもと7歳からすべてのカテゴリーにコンスタントなリーグ戦があります。10歳まではロッテルダム市内で11歳~15歳は北ホランド州、南ホランド州で16歳~18歳はオランダ全土で行います。

Q、各カテゴリーでコンセプトはありますか？

A、ありません。フェイエノールト出身のコーチのクオリティがすべてですが、よくなければ私(ステンリー氏)が指摘します。メニューは各コーチが決めます。コーチが責任を持っています。ゲームは、9歳以下は7対7、10歳以上は11対11です。各カテゴリーの選手は、育成の流れの中で、サッカーは考えなければいけないということを学びます。また、指導者は何を与えなければいけないかということを日々学び続け、選手に提供します。

Q、選手がよく考えることはできてもインサイドキックが出来なければいいパスは出来ないがそこはどう考えていますか？

トレーニングをやっていれば自然と出来るようになるのか？あるいは、止める、渡すというような技術は教え込むのですか？

A, 出来なければ個別に違うトレーニングを与えます。スペシャルメニュー(FW専門TRなど)を与えることもあります。

プロ的な結果オーライの考えでは、どんなパスでも目的地に届けばそれはいいパスだと考えます。技術も大切ですが、それよりも大切なのはパフォーマンスの結果です。極論からすれば、変なフォームでも1,000回やって1,000回パスが通ればそれはOK(認める)
技術習得がたやすく、すぐにうまくなってしまう子どもかどうか、やはりスカウトの目も重要ですね。

オランダでは標的に向って10回ボールを蹴って5回当たる子どもは、10回当てられるようになるのは難しいという考えをします。8回当てられる子どもは10回当てられるようになる可能性はある。フェイエノールトは8回当たる子を探してクラブに入れ指導しています。

ただし、オランダでも、例えば5回しか標的に当たらない子どもを指導している地域クラブももちろんたくさんありますが、フェイエノールトの教え方はそれらとは全く違います。

フェイエノールトは1年ごとの入れ替えがある優秀な20人で競争する環境です。

Q, フェイエノールトのスカウト方法は？

A, ロッテルダム中心、半径50kmの範囲に25人のスカウトがいます。

ほとんどがボランティアです。

さらに、5人がオランダ全土を観ます。3人がヨーロッパ全土を観ます。

Q, 選手の飛び級はありますか？

A, 5歳でも総合的に判断し対応できるとなれば受け入れます。5歳の子どもが現在3人います。しかし、トレーニングは月2回だけです。

トレーニングは大事ですが小さな若い子どもはまだまだ遊びの方が大事です。

Q, アカデミーの子どもを切らなければいけないときのポイントはありますか？

A, 難しい問題です。

切るか切らないかは指導者次第です。指導者の目です。

新しいよい子どもが見つかった時、誰を落とすかはプロの世界ではしかたのないことです。

ただし、フェイエノールトでは、結果的には多くの選手が18歳まで残っています。トップチーム18人のアカデミー出身者のほとんどが7歳からいます。

Q, 守備（守ること）に対してのコンセプトはありますか？

A, 守備へのアプローチは少ないです。攻撃主体になっています。

攻撃的な選手であった(マッカーイなど)スタッフ間で攻撃ビデオは作りました。しかし現在、守備ビデオも作成中です。おもしろいことにフェイエノールトから代表に選ばれるのはDFの選手です。なぜかわからない(笑)

スカウトの段階でDFの選手としてみてとってくださることもあります。

守備に関しては、GKもフィールドプレーヤー同様のトレーニングをすることです。

7歳~18歳まですべて教える事は一緒です。今その子どもが何をやったら伸びるのかを考え

ることです。シンプルに考えることが大事です。個別に子ども達を伸ばすことです。

■質疑を終えての感想と気付き (Q & Aから)

正直、現地では観てはいけないものを観てしまったなという印象でした。ステンリー氏もはっきりと「私達はサッカーをするために生まれて来た子を相手にしています」と言っていました。そういう子どもに対してインサイドキックはこうやって蹴るんだよという考えはないようです。ゲームをやって考えさせる、するとどんどん上手くなるといった感じです。その上でメンタル、フィジカルのケアと、最大限の気配りで怪我を防ぐことに重点を置いていました。

私達がスクールで観ている子供にAからBにパスが通ればつま先だろうと踵だろうと通ればOKとしてしまったら、すべてが破綻してしまうかもしれません。その出発点の違いを認識しないと指導者として大きく外れてしまうと感じましたので、私たちは技術をしっかり教えることから始めるという現実的な対応をすべきだと意を強くしました。

また、世界各国、どの国も保護者(親)の問題は同じでした。フェイエノールトが来年から親の見学を禁止しズバットとトレーニングやゲームでの親の関与を断ち切るようですが、これも日本では違うアプローチ方法を考えないと上手くはいかないと感じます。

さらに、育成法は各国、各クラブ様々ありますがオランダのサッカー文化を生で感じ、そしてフェイエノールトを一週間観させて頂き、とにかく「7歳からトップまでぶれないもの」と「意図的に偏ったもの」を感じました。無理をすれば真似することは可能かもしれませんが、まずは普及部で、スクール、SSチームで目の前の子どもに対して何を与えることが望ましいのか議論し、その年ごと指導する子どもに対してどのような考え方やプログラム、態度でいくのかのという一貫性の大事さを更に感じました。

最後に、選手を育成するには、指導者が教え込むだけではダメ、考えてみろだけでもダメ、ゲームをやっているだけでも限界があると痛感しました。選手を育てるための全体像が見えていない内は多くの悩みの壁に当たると言うことが今更ながらわかりました。同時にサッカーを教えようとする指導者の「思い」を選手には心底感じてほしいと思います。

ステンリー氏が日本人は始めからすべてをやろうとすると断っていました。正に自分はその状態にいます。ステンリー氏の言葉を胸に自分ができることから悠々と急ぎたいと思います。

